

不登校児の親グループにおける参加者の グループ体験と参加頻度の関連

中 地 展 生

問題と目的

質問紙調査研究の現状

不登校児の家族を援助する方法に、「親を対象としたサポート・グループ」（以下、親グループと表記する）がある。筆者はこれまで、そのような親グループを対象とした事例研究や参加者に対して心理テストやインタビュー調査を用いた研究を行っている（中地, 2006, 2007, 2011b）。ただし、これらは一事例のみの研究であったり、インタビュー調査なども4カ所の親グループの19名の母親という限られた人数を対象にしたものであった。

そこで、次の段階の研究としては、このような実践的、質的研究を踏まえたうえで、ある程度以上の親グループやその参加者を対象にした客観的、量的な研究が必要であると考えられた。その量的研究の第一歩として、筆者は、全国の親グループおよび、その参加者を対象とした質問紙調査を実施し、参加者のグループ体験に関する研究として、主に次の二つの観点からまとめて発表した。

そのうちの一つは、親グループ参加者がグループの「ファシリテーター」（以下、Faciと表記する）の行動をどのように認知しているのか、という“Faci行動認知”に関する研究である（中地, 2012a）。この研究では、

Faciの定義を、高松（2004）に従い、「グループ内において、中心的に司会や進行をしているスタッフ」とした。そして、申（1986）のエンカウンター・グループにおける先行研究をもとに、筆者の親グループ実践などから抽出した項目を加えて、親グループ用に修正し、調査を実施した。参加者からの回答を因子分析法によって分析し、親グループ参加者の“Faci行動認知”として、「気づきの促進」「個々の尊重」「率直さ」「相互作用の促進」「情報提供」の5因子を明らかにすることができた。

もう一つは、参加者が親グループから得られる“援助効果”の種類とその内容を特定するための研究である（中地, 2011a）。従来、実践的研究において、親グループにおける「援助効果要因」を探る研究がなされている。例えば、小野（2000）は、長年の親グループ実践の経験をまとめて、①孤立的な不幸感からの解放、②自由で安全な雰囲気、③受容、④共感と理解、⑤カタルシス、⑥将来の展望—希望、⑦対人関係の学習、⑧他のメンバーを通しての自己理解、⑨他のメンバーの洞察などからの学習、⑩理解の変化への刺激、⑪行動の変化への刺激、⑫価値観転換の見本、⑬情報・ガイダンス、の13の要因が親グループで働くとしている。しかし、これらの要因が

実際に親グループにおいて働くとして、具体的に参加者にどのような変化や効果があるのかという、参加者が親グループから得られる“援助効果”に関する研究はあまりなされていない。例えば、受容などの援助効果要因によって、参加者にどのような“援助効果”があるのだろうか。

このような点に注目して、中地（2011a）では、親グループ実践などから抽出した項目をもとにした質問紙調査を行い、参加者からの回答を因子分析法によって分析し、親グループ参加者への“援助効果”として、「子どもとの関わり方の変化」「情報提供」「社会に対する態度の変化」「孤立的不幸感からの解放」「愛他性」「安全な居場所体験」の6因子を特定した。

以上、この二つの観点から行った研究では、各々の研究目的はある程度達成されたといえるが、それぞれに共通の課題が残されていた。それは、「参加者の“Faci行動認知”と“援助効果”との関連がどのようになっているのか？」についての分析および考察がなされていないという点であり、今回の研究ではこの視点からの分析を試みた。

さらに、今回の研究に付け加えるべき視点として、「参加者の“Faci行動認知”と“援助効果”との関係が、親グループへの参加頻度によって異なるのか？」という視点が挙げられる。中地（2007）の事例でも見られているが、参加者のなかには、参加が安定せずに結果としてドロップアウトにいたってしまうということがしばしば起こり得る。参加頻度が高い参加者のグループ体験とそうでない参加者のグループ体験の違いを探ることができ

れば、Faciがこのようなドロップアウトを未然に防ぐことにつながると考えられる。

本研究の目的

本研究では、新たな分析基準を設けて、中地（2011a,2012a）で用いたデータの再分析を行い、参加頻度が高い参加者群とそうでない群とでは、“Faci行動認知”や“援助効果”との関係にどのような違いが見られるのかを検証し、親グループにおいてFaciが行うファシリテーションの手がかりとすることを目的とする。

方法

調査対象者

小野（2000）が作成した親グループのリストや、不登校情報センターの刊行物（2005）、筆者の知り合いの親グループの主催者からの情報などを参考に、調査対象とするグループを選定した。なお、対象とする親グループは月に1回以上開催されていることを条件とした。各グループの主催者に対して、筆者が直接あるいは電話で今回の調査の目的などの説明を行い、了承を得た主催者宛に見本の質問紙を一式送付した。それを検討していただいたうえで、調査協力の可否を返信用のハガキにて知らせてもらった。なお、可の場合は協力していただける参加者の人数も記入してもらった。結果として43グループ（主催者数43名、参加者数462名）から調査協力の承諾を得た。

質問紙の構成

（1）“Faci行動認知”項目の作成

申（1986）のエンカウンター・グループ用の「Faci関係認知スケール」（5件法）を参

考にした。これは、「Faci行動項目」12項目と「メンバー反応項目」9項目から構成されている。「Faci行動項目」は、①「相互作用の促進」（5項目）、②「率直さ」（3項目）、③「無理強い」（2項目）、④「傾聴」（2項目）の4因子からなる尺度である。この①～④の12項目に、筆者が行った不登校児の親グループにおける参加者のセッションアンケートや逐語録、毎セッション後にFaci同士で話し合ったことなどを参考にして項目を抽出して、新たに19項目を追加した。なお、この追加項目は臨床心理士3名により内容的妥当性の評価を行い3名が妥当と認めた項目であり、これら全31項目を不登校児の親グループにおける“Faci行動認知”項目として採用した。また、「メンバー反応項目」はそのまま使用したが今回は分析対象としていない。回答者には、「中心となってグループの司会や進行をされているスタッフが、あなたやグループにどのように関わったと思いますか？また、あなたは彼にどのような印象を持ちましたか？」を訊ね5件法で回答を求めた。

（2）“援助効果”項目の作成

具体的な質問項目については、筆者が行った親グループにおける参加者のセッションアンケートや逐語録を中心に抽出した。各項目について臨床心理士3名による内容的妥当性の検討を行い、44項目からなる質問紙を作成した。また、事前に外部の2名の親グループ主催者にこの段階の参加者用の質問紙を送り、意見や感想を訊ねたところ、「社会との関係」についての項目を追加してはどうかとの指摘を受けた。そこで、先行研究なども参考にしつつ、帝塚山大学大学院臨床社会心理学専攻

の大学院生5名と筆者とともに、「社会との関係」についての追加項目を選び、同様の手続きをえて、最終的に全51項目からなる質問紙を作成した。グループに参加してから今までに、どのようなことを自分は得られたと思うかについて、4件法で回答を求めた。

（3）フェイスシート

回答者の「年齢」や「性別」、グループへの「参加頻度」や「参加年数」なども記入してもらった。

（4）その他

この他にも関連する質問を行っているが、今回は以上を分析対象とする。なお、主催者への質問も行っているが今回は分析の対象としない。

手続き

各グループの主催者宛に主催者用、参加者用の質問紙と返信用の封筒を人数分送付した。両者の質問紙とも本調査の主旨とプライバシーへの配慮などを説明する文章を記載し、それに同意していただける方のみ回答後、個別に返送してもらうように依頼した。調査期間は2008年6月～10月であった。

結果

41カ所の親グループ、参加者213名（回収率46.1%；男性15名、女性195名、無記入3名）から回答があった。参加者の平均年齢49.17歳（ $SD=6.14$ ）、グループへの平均参加年数は、4.90年（ $SD=4.66$ ）、Faciの種類は、臨床心理士、教育経験者、医療関係者、子どもの不登校を経験した親などであった。グループへの参加頻度は、「ほぼ毎回参加している」（以下、「頻度・高」と表記する）が96名、

「まあまあ参加している」(同;「頻度・中」)が72名、「あまり参加していない」(同;「頻度・低」)が30名、不明などが7名であった。今回は、回答の信頼性の観点から、本研究の全ての分析において「頻度・低」の者と参加頻度が不明な者のデータ(計37名分)は使用しない。なお、回答に不備があった者のデータは当該分析の都度に除外をしたため、分析によって人数が異なっている。

“Faci行動認知”項目の分析結果

中地(2012a)では、申(1986)の先行研究に従いVarimax回転を採用したが、今回は、各因子間の相関を仮定しPromax回転を用いた(因子抽出は前回と同じ主因子法を用いた)。Kaiser-Guttman基準をもとに6因子を求めたが、この6因子では説明が困難であり、解釈可能性などを考慮して5因子に設

定し分析を行った。さらに、因子負荷量が絶対値で.40以上であること(ただし、複数の因子にまたがって.40以上ではないこと)を基準に4項目を除外し、残った27項目について再度5因子で分析を行った。回転前のこの5因子27項目によって説明できる割合は、54.0%であった。

次に、第一因子「気づきの促進(11項目)」、第二因子「相互作用の促進(7項目)」、第三因子「個々の尊重(5項目)」、第四因子「情報提供(2項目)」、第五因子「率直さ(2項目)」と命名した。各因子のCronbachの α 係数は第一因子から順に.89、.90、.82、.64、.45となった。この結果をTable 1に示す。ただし、この α 係数の状態から、第五因子「率直さ」の信頼性は低く、実際の“Faci行動認知”の因子としてはこれを除くことにした。

Table 1 不登校児の親グループ参加者の“Faci行動認知”項目の因子分析の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	h^2
【気づきの促進】 $\alpha = .89$						
10 彼は子どもとの接し方について具体的なアドバイスをしてくれる	.89	-.13	-.05	.00	.08	.69
19 彼は不登校についての専門的な知識を提供してくれる	.83	-.03	-.15	.15	-.05	.62
9 彼は私の視野を広げるような発言をしてくれる	.78	-.01	.05	.02	.06	.68
31 彼は私に子どもがちゃんと成長していることを気づかせてくれる	.75	.12	-.01	-.06	-.05	.62
40 彼は学校との具体的な協力の仕方についてアドバイスをしてくれる	.71	-.14	.21	.21	-.13	.58
6 彼は私に子どもの不登校についての理解が深まるような手助けをしてくれる	.66	.12	.08	-.08	-.13	.50
23 彼は私に家族関係を見直すような指摘をしてくれる	.61	-.08	-.09	-.19	.25	.44
15 彼は私に自分自身の課題について気づかせてくれる	.58	-.08	.13	.09	.20	.54
35 彼は私の自己理解が深まるようなやり取りをしてくれる	.51	.21	.28	-.11	.07	.68
22 彼はそれぞれのメンバーの発言を要約して伝えてくれる	.45	.31	-.01	.09	-.19	.44
30 彼はあまり発言せずに、メンバーにグループを任せているように感じる(逆転項目)	-.42	-.10	.24	-.10	.06	.20
【相互作用の促進】 $\alpha = .90$						
13 彼はメンバー同士のコミュニケーションを円滑にしている①	-.22	.81	.08	.18	.06	.74
28 彼は少人数だけで話が進んでいく時には、全員が話しに加われるように配慮してくれる	.09	.80	-.04	-.13	-.12	.56
18 彼はそれぞれのメンバーの共通点を見つけて話しやすくしてくれる	.13	.75	.02	.05	.00	.75
16 彼はメンバー相互の意思の疎通をはかるように努めていた①	-.12	.66	.07	.16	-.01	.52
1 彼はメンバーそれぞれの体験談を話しやすい雰囲気を作ってくれる	.07	.82	.17	-.11	.12	.61
11 彼は一つの話題にかたよるのではなく、できるだけ多くのメンバーが共有できるような話題になるよう配慮してくれる	.31	.60	-.11	.00	-.04	.58
32 彼はグループに活気をもたらした①	.27	.49	-.07	-.05	.27	.62
【個々の尊重】 $\alpha = .82$						
17 彼はみんなに自分の意見をおしつける(逆転項目)③	.05	-.07	-.76	.00	.18	.56
33 彼はみんなに無理強いするようなところがある(逆転項目)③	-.03	.05	-.73	.02	.15	.46
38 彼は一人ひとりの異なる意見や考え方を大切にしてくれる	-.18	.07	.69	.10	.10	.55
34 彼はみんなの話を理解しようと耳を傾けていた④	.01	-.07	.54	.02	.15	.33
4 彼はメンバーの言うことをよく聞いてくれた④	.07	.12	.51	-.03	-.02	.38
【情報提供】 $\alpha = .64$						
14 彼は不登校についての講演会や親の会の情報を提供してくれる	.03	.03	.06	.75	.13	.68
27 彼は地域にある相談機関の情報を提供してくれる	.14	.08	-.01	.46	.04	.33
【率直さ】 $\alpha = .45$						
26 彼は率直に自分を表現している②	-.01	-.07	.15	.06	.81	.71
8 彼は感情の表し方がストレートだ②	.02	.06	-.36	.12	.44	.23
因子間相関						
F1	.64	.39	.28	.43		
F2		.58	.45	.35		
F3			.36	.29		
F4				.13		

注1) $N = 155$

注2) 申(1986)の4つの因子については対応する番号を項目末尾に示す。

“援助効果”項目の分析結果

中地（2011a）と同じ手法を用いて因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。Kaiser-Guttman基準をもとに11因子を求めたが、この11因子では説明が困難であり、解釈可能性などを考慮して7因子に設定し分析を行った。さらに、因子負荷量が絶対値で.40以上であること（ただし、複数の因子にまたがって.40以上でないこと）を基準に18項目を除外し、残った33項目について再度7因子で分析を行った。回転前のこの7因子33項目によって説明できる割合は54.9%であった。

次に、第一因子「子どもとの関わり方の変

化（12項目）」、第二因子「社会への積極的コミットメント（5項目）」、第三因子「情報取得（5項目）」、第四因子「他の参加者への愛他的コミットメント（2項目）」、第五因子「気持ちの安定（4項目）」、第六因子「安全感（3項目）」、第七因子「焦りの軽減（2項目）」と命名した。各因子のCronbachの α 係数は第一因子から順に.91、.84、.80、.86、.78、.58、.60となった。第六、七因子は信頼性が低いものの、その他の因子については、十分な信頼性確認された。この結果をTable 2に示す。

また、今回の分析では、新たな妥当性の基

Table 2 不登校児の親グループ参加者への“援助効果”項目の因子分析の結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	R^2
【子どもとの関わり方の変化】 $\alpha = .91$								
32 いつも自分の物差しで子どもを見ていたことに気がついた	.91	-.09	-.03	-.03	.00	-.24	-.08	.64
23 子どもの今できているところにも目が向くようになった	.76	.07	-.05	-.02	-.04	.07	.00	.60
41 子どもが自分で決めることに任せようと思うようになった	.76	-.09	-.05	-.06	-.05	.13	.16	.59
8 登校させることばかり考えていた親のこだわりを変えられた	.74	-.21	.04	.12	-1.10	-.03	.12	.51
8 子どもの学歴や成績にこだわってきた価値観を変えられた	.73	-.01	.01	.00	.00	-.23	.18	.57
15 子どもを待てるようになった	.69	-.07	.00	-.01	.04	.09	.15	.60
33 地域の日や世間体を以前のようには気にしなくなった	.62	.19	.00	.13	-.13	.14	-.08	.57
34 子どもと適度な距離がとれるようになった	.62	.05	-.08	.08	.21	.00	-.08	.59
40 親として頑張らないといけないという負いがあったことに気がついた	.56	.08	.03	-.13	.21	-.10	-.21	.46
7 子どもの気持ちを理解することができるようになった	.54	-.07	-.13	.17	.22	.03	.17	.61
42 自分の意見を言ったり、人の話をちゃんと聞いたりする練習ができた	.51	.11	-.01	-.10	.00	.11	.13	.37
21 子どもの不登校を受け入れることができた	.47	.02	.01	.20	.14	.05	.10	.55
【社会への積極的コミットメント】 $\alpha = .84$								
49 社会は自分の働きかけで変わると思うようになった	-.18	.91	-.08	-.06	.00	-.07	.19	.65
46 社会に対して一人の親として積極的に関わっていく勇気ももらえた	.10	.82	-.09	.09	-.02	-.06	-.02	.72
45 社会に不登校への理解を求めようと思うようになった	-.22	.66	-.04	.10	.25	-.11	.13	.56
47 周囲に対して自分の親としての気持ちを自然に語るできるようになった	.21	.63	-.11	-.07	-.05	.15	-.08	.48
50 学校に対して親としての自分の意見をちゃんと伝えられるようになった	-.03	.56	.16	.17	-.06	.10	.06	.54
【情報取得】 $\alpha = .80$								
35 プリンスクールや適応指導教室のような子どもの居場所についての情報を得ることができた	-.05	-.11	.84	-.02	.02	.08	.00	.61
30 不登校に関する講演会や親の会の情報を得ることができた	-.03	-.03	.83	-.02	.04	.00	.13	.72
16 地域にある相談機関についての情報を得ることができた	-.14	-.09	.62	.11	.14	.01	.03	.42
48 地域にある不登校の講演会や勉強会に積極的に参加するようになった	.18	.29	.55	.10	-.20	-.13	-.05	.61
43 他の学校の不登校の受け入れ体制について知ることができた	-.03	-.07	.54	.14	-.03	-.04	.24	.41
【他の参加者への愛他的コミットメント】 $\alpha = .86$								
29 自分の乗り越えてきた体験を語り、他の親を助けてあげることができた	.05	.08	.08	.87	-.04	.07	-.21	.79
11 自分の経験を話して、他の親の役に立つことができた	.00	.05	.05	.82	.10	-.03	-.07	.75
【気持ちの安定】 $\alpha = .78$								
12 親も弱音を吐いていいんだと思えるようになった	.20	.01	.18	-.08	.70	.07	-.32	.73
5 自分の気持ちをわかってもらえた	.03	-.03	-.05	.12	.68	-.01	.02	.54
10 子どもの将来に対して希望や展望を持つことができた	.08	.01	-.02	.20	.52	.02	.23	.65
14 子どもの不登校で悩んでいるのは自分一人ではないとわかって安心できた	.13	.13	.27	-.28	.44	.02	.11	.51
【安全感】 $\alpha = .58$								
26 自分が話したいことを話さなくて不満が残ることがあった(逆転項目)	.14	.06	-.02	-.10	-.08	-.58	.04	.33
6 緊張して疲れることが多かった(逆転項目)	.06	.02	.05	.00	-.08	-.55	-.12	.35
38 参加者の話は自分とはかけ離れていて理解することができなかった(逆転項目)	-.15	-.04	-.09	.06	.14	-.46	.02	.25
【焦りの軽減】 $\alpha = .60$								
1 焦らずにやっという気持ちになれた	.21	.12	.10	-.19	-.01	.08	.61	.50
2 他の家族の様子を知って、自分の家族の参考にする事ができた	.14	.11	.12	-.12	-.06	-.03	.55	.35
因子間相関								
F1		F2	F3	F4	F5	F6	F7	
F2	.47		F3	F4	F5	F6	F7	
F3	.41	.46		F4	F5	F6	F7	
F4	.34	.40	.29		F4	F5	F6	F7
F5	.57	.39	.44	.40		F6	F7	
F6	.30	.12	-.03	.26	.14		F7	
F7	.29	.08	.19	.43	.37	.24		

注) N=146

準として、板橋（2000）の研究知見を参考にした。板橋は、「不登校の親の会（同一の主催者によって、各地で開催されている）」の参加者で子どもの不登校経験をもつ母親（66名）に養育態度などを訊ね、子ども受容度では、子どもが不登校になってから2年以上の母親のほうが2年未満の母親より高くなることを明らかにした。さらに、親自身の自己実現では、子どもを受容するよりも長い期間を要すると考察している。ここから、今回の“援助効果”項目の妥当性の基準として、グループへの参加年数に注目し、参加年数が2年以上の者のほうがより“援助効果”を得られていると考え、この基準に従い、項目ごとの弁別性の検証を行った。具体的には、*t*検定によって参加年数2年未満／2年以上群の各項目の平均値を比較し、2年以上群が有意に高い項目のみを採用することにした。

このような手順を踏んで、最終的に、5因子23項目（「子どもとの関わり方の変化（10項目）」／「社会への積極的コミットメント（2項目）」／「情報取得（5項目）」／「他の参加者への愛他的コミットメント（2項目）」／「気持ちの安定（4項目）」）が残った。各因子のCronbachの α 係数は第一因子から順に.89、.60、.80、.86、.78、となり第二因子がやや低いもののその他の因子には十分な信頼性が見られた。この結果をTable 3に示す。

相関分析の結果

参加頻度別の“Faci行動認知”と“援助効果”の各因子の関連を調べるために、「頻度・高」群（ $N=82$ ）と「頻度・中」群（ $N=57$ ）ごとの、“援助効果”と“Faci行動認知”の各因子の相関分析を行った。この結果をTable

Table 3 2年未満／2年以上群の各項目得点平均値とSDおよび*t*検定の結果

因子	項目	2年未満(N=51)		2年以上(N=95)		自由度	<i>t</i> 値	有意確率
		平均	SD	平均	SD			
第一	32	2.94	0.95	3.31	0.77	144	2.51	*
	23	3.14	0.75	3.27	0.64	144	1.15	n.s.
	41	3.20	0.78	3.45	0.68	144	2.07	*
	31	2.90	0.99	3.29	0.76	144	2.69	**
	8	2.65	0.93	3.20	0.83	144	3.66	***
	15	3.10	0.83	3.34	0.71	144	1.83	†
	33	2.71	0.86	3.13	0.78	144	3.01	**
	34	2.76	0.65	3.09	0.72	144	2.74	**
	40	2.73	0.80	3.04	0.85	144	2.19	*
	7	2.96	0.80	3.38	0.64	144	3.45	**
第二	42	2.96	0.80	3.25	0.67	144	2.35	**
	21	3.08	0.80	3.46	0.65	144	3.15	**
	49	1.80	0.78	2.01	0.81	144	1.50	n.s.
	46	2.65	0.74	2.83	0.85	144	1.31	n.s.
	45	2.51	0.93	2.86	0.91	144	2.23	*
第三	47	2.76	0.82	3.02	0.85	144	1.76	†
	50	2.45	0.86	2.85	0.92	144	2.57	*
	35	2.59	0.90	3.04	0.76	88.5	3.07	**
	30	2.76	0.99	3.26	0.67	75.2	3.22	**
	16	2.33	1.01	2.73	0.93	144	2.36	*
第四	48	2.55	1.03	3.04	0.93	144	2.94	**
	43	2.35	0.84	2.92	0.77	144	4.08	***
	29	1.78	0.73	2.73	0.88	119.8	6.91	***
第五	11	2.02	0.81	2.78	0.81	144	5.38	***
	12	3.00	1.00	3.46	0.67	74.6	2.97	**
	5	3.29	0.73	3.56	0.58	84.3	2.23	*
第六	10	2.69	0.88	3.16	0.79	144	3.30	**
	14	3.37	0.87	3.73	0.57	73.8	2.61	*
第七	26	3.27	0.70	3.45	0.60	144	1.62	n.s.
	6	3.37	0.82	3.39	0.70	144	0.13	n.s.
	38	3.69	0.51	3.60	0.53	144	0.95	n.s.
第七	1	3.43	0.70	3.48	0.65	144	0.46	n.s.
	2	3.33	0.71	3.37	0.65	144	0.30	n.s.

注1) 採用した項目を網かけで示した。† $p < 0.10$ 、* $p < 0.05$ 、** $p < 0.01$ 、*** $p < 0.001$
 注2) 残った各因子の α 係数は、第一因子から順に.89,.60,.80,.86,.78

4、Table 5に示す。

頻度・高群では、「気づきの促進」と「子どもとの関わり方の変化」および「気持ちの安定」の間に十分な相関が確認された（それぞれ、 $r = .49$ 、 $r = .46$ ）。また、「相互作用の促進」でも「気持ちの安定」との間に相関があった（ $r = .35$ ）。さらに、「情報提供」は「情報取得」との間に強い相関があり（ $r = .65$ ）、「社会への積極的コミットメント」や「気持ちの安定」との間にも相関が確認できた（それぞれ $r = .41$ 、 $r = .37$ ）。一方、頻度・中群では、「気づきの促進」と「子どもとの関わり方の変化」や「相互作用の促進」と

Table 4 頻度・高群の“Faci行動認知”と“援助効果”の各因子の相関

	気づきの促進	相互作用の促進	個々の尊重	情報提供
「子ども」	.49***	.17 <i>ns</i>	.15 <i>ns</i>	.11 <i>ns</i>
「社会」	.19†	.28*	.25†	.41***
「情報」	.23*	.22*	-.01 <i>ns</i>	.65***
「愛他」	.17 <i>ns</i>	.10 <i>ns</i>	.06 <i>ns</i>	.31**
「安定」	.46***	.35**	.10 <i>ns</i>	.37**

注1) N=82 †p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001
 注2) “援助効果”の各因子を、「子どもとの関わり方の変化」=「子ども」/「社会への積極的コミットメント」=「社会」/「情報取得」=「情報」/「他の参加者への愛他的コミットメント」=「愛他」/「気持ちの安定」=「安定」と表記した。

Table 5 頻度・中群の“Faci行動認知”と“援助効果”の各因子の相関

	気づきの促進	相互作用の促進	個々の尊重	情報提供
「子ども」	.23†	.21 <i>ns</i>	.03 <i>ns</i>	.17 <i>ns</i>
「社会」	.06 <i>ns</i>	.05 <i>ns</i>	.13 <i>ns</i>	-.02 <i>ns</i>
「情報」	.10 <i>ns</i>	.26†	-.09 <i>ns</i>	.22 <i>ns</i>
「愛他」	-.04 <i>ns</i>	.10 <i>ns</i>	.12 <i>ns</i>	.08 <i>ns</i>
「安定」	-.08 <i>ns</i>	-.09 <i>ns</i>	-.09 <i>ns</i>	-.15 <i>ns</i>

注1) N=57 †p<.10
 注2) “援助効果”の各因子を、「子どもとの関わり方の変化」=「子ども」/「社会への積極的コミットメント」=「社会」/「情報取得」=「情報」/「他の参加者への愛他的コミットメント」=「愛他」/「気持ちの安定」=「安定」と表記した。

「情報取得」にそれぞれ有意傾向が確認されたが、それ以外は明確な相関関係は見られなかった。

考察

本研究は、参加者の参加頻度の違いによる、“Faci行動認知”と“援助効果”の関連の特徴を明らかにし、親グループにおいてFaciが行うファシリテーションに資する知見を見いだすことを目的とした。よって、まず、因子分析の結果についての考察を行い、その後、この目的にそって相関分析の結果についての検討を加える。

“Faci行動認知”と“援助効果”の各因子の内容

(1) “Faci行動認知”の各因子

各因子のなかで、親グループ独自の項目との高い因子負荷を示したのは、第一因子「気づきの促進」と第四因子「情報提供」であっ

た。前者は、「メンバーの視野を広げる」や「子どもについての理解を深める」などの、Faciが行う積極的、具体的な援助行動を認知したものであり、後者は、地域にある相談資源の情報提供や、講演会や他の親の会についての情報提供に関する援助活動を認知したものとイえる。

その他、第二因子「相互作用の促進」は、申（1986）の①「相互作用の促進」の3項目などを含む、グループでメンバーが取り残されたりしないように配慮するという項目が高い因子負荷を示した。これは、子どものペースや親自身の状態なども異なる様々なメンバーがいることを考えれば、円滑にグループを進めていくために、Faciにとっては常に考慮に入れておく必要がある行動であろう。また、第三因子「個々の尊重」については、申（1986）の③「無理強い」と④「傾聴」が高い因子負荷を示したものである。その内容からも、Faciが自分の意見を押しついたりせずに傾聴姿勢で、メンバー一人ひとりを尊重し、グループにおいて安心してメンバーが過ごせるFaciの態度を指すものと考えられる。

(2) “援助効果”の各因子

第一因子「子どもとの関わり方の変化」では、「自分の物差しで子どもを見ていたことに気がついた」というような、子ども理解の深まりに関する項目、「子どもの学歴や成績にこだわってきた価値観を変えることができた」というような、親としての価値観の変化があったという項目が高い因子負荷を示している。「子ども」の不登校という共通の課題をもつ親たちが参加しているグループであることを考えれば、子どもとの関わり方が変化

することを示すこの因子は、最も重要な援助効果を表すものと考えられる。第二因子は、「社会への積極的コミットメント」である。これは、「学校に対して自分の意見をちゃんと伝えられるようになった」というような、学校に代表される社会とのつながりを取り戻し、積極的に関わっていく態度となる変化が示されたものである。

第三因子は、「情報取得」である。各項目からは地域にあるフリースクールや相談機関、不登校の講演会や親の会の情報など様々な情報を得られていることがわかる。第四因子は、「他の参加者への愛他的コミットメント」である。これはセルフヘルプ・グループの効果として知られており、他者を助けるという行動を通して、参加者自身の自己効力感の向上につながるという効果を表すものといえる。第五因子は、「気持ちの安定」である。「親も弱音を吐いていいんだと思えるようになった」や「子どもの不登校で悩んでいるのは自分一人ではないとわかって安心できた」などの項目からなり、臨床的な先行研究（小野, 2000；中地, 2007）などからも親グループから参加者が得られる最も重要な援助効果といえる。

参加頻度と“Faci行動認知”と“援助効果”の関連

頻度・高群は、親グループに参加することに意味を感じている群であり、頻度・中群は、高群に比べると何らかの事情で参加意欲が低い群と見なすことができる。

頻度・高群では、“Faci行動認知”の「情報提供」と“援助効果”の「情報取得」が最も強い相関関係にあった。この関係は比較的わかりやすく、Faciが地域にある相談機関や親

の会などの情報を提供してくれたと認知する参加者ほど、当然、“援助効果”として「情報取得」ができていたと考えられる。さらに、Faciの「情報提供」と「社会への積極的コミットメント」にも相関が確認できたことから、Faciによる情報提供が参加者の学校などとのつきあい方の変化にも関連しているものと推測される。

次に、最も注目すべき点として、「気づきの促進」と「相互作用の促進」を取り上げる。まず、「気づきの促進」と、“援助効果”のうち「子どもとの関わり方の変化」との間に相関があることは因子の内容からもよく理解できる。しかし、それだけではなく、「気づきの促進」は「気持ちの安定」との間にも十分な相関があった。これはFaciが「気づきの促進」を、単に「子どもとの関わり方の変化」との関連のみで理解するのではなく、参加者が「気持ちの安定」を親グループからきちんと得られているかを考慮することで、より効果的なファシリテーションにつながる可能性があることを示している。また、「相互作用の促進」と「気持ちの安定」にも相関があり、Faciの積極的なグループへの関わりを認知する参加者ほど、より「気持ちの安定」も得られているという関係が推測される。

このようなFaciの行動と「気持ちの安定」に関する臨床的研究としては次のようなものがある。安部（1984）は約1年間の親グループ実践をとおして、5人の母親と各々の子どもとの距離や母子関係が変化したという事例を報告している。そこでは、まずFaciは、母親の話に耳を傾け、母親のつらさやしんどさを分かち持つ仲間の一人になることが重要で

あり、次にFaciが自分だけがリーダーシップをとろうとするのではなく、メンバー同士の援助力を引き出し、共に支えていこうとする姿勢が大切であったと考察している。中地(2012b)も親グループの3名の母親の発言などを分析し、Faciや他の母親に心理的に支えられ、そのうえで価値観の変化への刺激を受ける体験をするという「支えられつつの変化」が可能である点が、個人面接などにはない、親グループ独自の援助の特徴であると指摘している。頻度・高群に確認されたこのような相関関係は、これらの臨床的な研究知見を裏づけるものといえよう。

その一方で、頻度・中群では、このようなFaciの行動と「気持ちの安定」とがうまく結びついていないことから、それが参加者の参加頻度を下げの一因となるものと考えられる。伊藤(2000)の「不登校を考える会」では、毎回終了時アンケートを参加者にとっており、そのなかの「参加されて、好ましくないと感じられたことがあればお書きください」という質問に、プライバシーに関して不安を感じるという保護者の回答があったことを報告している。また、菊地(2009)は、(例会に積極的に参加しない)「周辺的なメンバー」に焦点を当てて、インタビュー調査などを行っている。その結果、例会で他者の体験を聞くことによる「つらさ」の存在が親たちの足を遠のけている大きな要因であり、その一方で「情報を得られる」や「精神的な支え」などが親たちが会に所属し続けている要因であることを明らかにしている。

このように、伊藤や菊地の報告からは、親グループに参加している親がもつ様々な不安

や葛藤など複雑な心境が見て取れる。特に、頻度・中群のなかにはこのような心境の親が多く存在していると考えられ、Faciはそれらを考慮したうえで、まずは「気持ちの安定」に着目したファシリテーションを行うことが必要であろう。

本研究の限界と今後の課題

従来、親グループ参加者を対象としたこのような規模の調査はほとんど行われておらず、本研究は、全国の親グループ参加者を対象とした質問紙調査研究の基礎となる研究として位置づけられる。そのため、調査手法や分析方法など本研究の限界や課題を吟味し、次の研究に発展的につなげていくことが望まれる。

特に、本研究の限界としては、今回は中心となるスタッフをFaciとしてひとくくりにして分析したため、Faci側の条件が及ぼす影響についての検討ができていないという点が挙げられる。当然、Faciの専門性や運営手法の違い、性別、経験年数などが、参加者の“Faci行動認知”や“援助効果”あるいは参加頻度と関連していることが推測される。しかし、この関連については今回の研究では十分に明らかにすることができなかった。このようなことを踏まえて、Faci側の条件と諸要因との関連を明らかにしていくことが今後の大きな課題といえよう。

さらに、他の課題としては、“Faci行動認知”と“援助効果”の項目を精査し、より妥当性を高めていくことが考えられる。そのためには、外部の親グループ主催者やFaciとともに、これらの項目について検討する場をもつなどの工夫が必要であろう。また、実際の親グループにおいてこれらの質問紙を実施し

て、グループ内での参加者の言動や参加状態などの臨床的なデータも用いた相補的な研究を行うことも今後の課題である。

るメンバーのファシリテーター関係認知スケール作成の試み 心理学研究, 57(1), 39-42.
高松 里 (2004): セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイドー始め方・続け方・終わり方 金剛出版

文献

- 安部恒久 (1984): 登校拒否児をもつ母親へのグループ・アプローチ 人間性心理学研究, 2, 110-120.
- 不登校情報センター (2005): 最新版不登校・引きこもり・ニート支援団体ガイド 子どもの未来社
- 板橋登子 (2000): 不登校児をもつ母親の養育態度と自己像 カウンセリング研究, 33(1), 8-17.
- 伊藤 隆 (2000): 「不登校を考える会」についてー保護者と教師の集まりー 日本私学教育研究所紀要, 35(1), 273-290.
- 菊地千夏 (2009): 不登校の親の会の意義に関する一考察ー周辺的なメンバーに焦点を当てて 現代社会学研究, 22, 35-48.
- 中地展生 (2006): 不登校児の親グループ 野島一彦 (編) 現代のエスプリ別冊 臨床心理地域援助研究セミナー, 128-138.
- 中地展生 (2007): 公立の教育相談機関における不登校児の母親へのグループ・アプローチ 心理臨床学研究, 25(1), 49-59.
- 中地展生 (2011a): 不登校児の親グループの援助効果に関する研究 帝塚山大学心理福祉学部紀要, 7, 119-130.
- 中地展生 (2011b): 不登校児の親グループに参加した母親からみた家族システムの変化に関する実証的研究 心理臨床学研究, 29(3), 281-292.
- 中地展生 (2012a): 不登校児の親グループ参加者の“ファシリテーター行動認知”と諸要因との関連ー参加頻度、参加年数、グループのタイプの視点から 心理臨床学研究, 29(6), 797-802.
- 中地展生 (2012b): 不登校児の母親の変化過程およびその変化に影響を与える要因に関する研究ー親グループ新規参加者3名の「期待」に着目して 帝塚山大学心理学部紀要, 1, 113-126.
- 小野 修 (2000): 子どもとともに成長する不登校児の「親のグループ」ーファシリテーターのためのマニュアル 黎明書房
- 申 栄治 (1986): エンカウンター・グループにおけ

Relationship between participants' experience and frequency of participation in a group for parents of children not attending school

Nobuo Nakaji

Abstract

This study investigates the relationship between participants' "experience" and "frequency of participation" in a group for parents of children not attending school. Experience focused on participants' perceptions of facilitator behavior (Nakaji, 2012a) and helpfulness of group for participants (Nakaji, 2011a). The frequency of participation focused on high-frequency and middle-frequency groups. First, the data of 168 participants used in Nakaji (2011a, 2012a) was reanalyzed with new standards. Factor analyses yielded four factors for facilitator behavior (facilitation of understanding, facilitation of interaction, respect for each participant, and imparting information) and five factors for helpfulness (change of attitudes toward children, positive commitment to the community, information acquisition, altruistic commitment to the other participants, and stability of one's own feelings). Second, correlation analysis was performed between each factor according to the frequency of participation. The result indicated that facilitation of understanding and facilitation of interaction were related with the stability of one's own feelings in the high-frequency group. However, there were no such relations in the middle-frequency group. Differences in participants' experiences may have affected their frequency of participation. For effective facilitation, it will be necessary for each facilitator to consider whether a participant gains sufficient stability of his/her own feelings through the group.

Key words : children not attending school, group experience, frequency of participation